

詩篇119篇17～24節

- 17 あなたのしもべを豊かにあしらい、私を生かし、私が**あなたのことば**を守るようにしてください。
- 18 私の目を開いてください。私が、**あなたのみおしえ**のうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。
- 19 私は地では旅人です。**あなたの仰せ**を私に隠さないでください。
- 20 私のたましいは、いつも**あなたのさばき**を慕い、砕かれています。
- 21 あなたは、**あなたの仰せ**から迷い出る高ぶる者、のろわるべき者をお叱りになります。
- 22 どうか、私から、そしりとさげすみとを取り去ってください。私は**あなたのさとし**を守っているからです。
- 23 たとい君主たちが座して、私に敵対して語り合ってもあなたのしもべは**あなたのおきて**に思いを潜めます。
- 24 まことに、**あなたのさとし**は私の喜び、私の相談相手です。

גָּמַל עַל-עֲבֹדָה אֶתְיָה וְאִשְׁמְרָה דְּבַרְךָ:
 גַּל-עֵינַי וְאֲבִיטָה נִפְלְאוֹת מִתּוֹרָתְךָ:
 גַּר אֲנִכִּי בָאָרֶץ אֶל-תְּסוּתֵר מִמֶּנִּי מִצְוֹתֶיךָ:
 גָּרְסָה נַפְשִׁי לְתַאֲבָה אֶל-מִשְׁפָּטֶיךָ בְּכָל-עֵת:
 גָּעַרְתָּ יוֹדִים אַרְוָרִים הַשְּׂגִים מִמִּצְוֹתֶיךָ:
 גַּל מִעַלִּי חֶרְפָּה וְבוֹז כִּי עֲלִיתִיךָ נִצָּרְתִּי:
 גַּם יָשָׁבוּ שָׂרִים בִּי נִדְּבָרוּ עֲבֹדָה יִשְׁיִת בְּתַקְיָה:
 גַּם-עֲלִיתִיךָ שְׁעִשְׁעִי אֲנִשִּׁי עֲצָתִי:

今日はヘブル語アルファベットの第三字「ギメル」を文頭に置いた八行を見てまいります。まずは用語の説明から。

- 「גָּמַל／ガーマル」…「十分な扱いをする」「賠償金を支払う」「報酬を支払う」
- 「גָּלָה／ガラー」…「覆いを取り除く」「引越す」「自身を現す」
- 「גָּר／ガール」…「一時的な滞在」「居留」
- 「גָּרַס／ガース」…「壊される」「破壊される」
- 「גָּעַר／ガール」…「叱る」「戒める」「墮落させる」
- 「גָּלָל／ガラル」…「転がして行く」→「取り去る」
- 「גַּם／ガム」…「また」「でさえ」「確かに」「さらに」

各節に登場する「ことば」「みおしえ」「仰せ」「さばき」「さとし」という言葉がいずれも主の律法を指すということは、繰り返す必要もないでしょう。

詩人は自分がその律法を破りうる存在であることを深く自覚していましたので、「私が…守るようにしてください」(17節)と主の助けを求めているのです。彼の思いはすべての罪人に理解されるはずですが、私たちは「分かっているながら従わない」ということをいつでもやりがちだからです。

また、詩人は「私の目を開いてください」(18節)と、自分の「霊の眼」が閉ざされた状態にあることを望みません。「あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるように」(18節)ともあるように、聖書の読者はそこに書かれているところの字面だけをなぞることもできれば、そこから福音を聞き取ることもできるのです。多くの宝が隠されているはずの聖書をどう読むか、それは技術以前に、御霊によって心が開かれるかどうかにかかっています。

「私は地では旅人です」(19節)と述べるところに、詩人が自分の人生を束の間のもので認識していたことが窺えます。人はこの世に生まれてくるかぎり、定められた法の下で生きていかななくてはなりません。その法を学んでいなくては、知らずして罪を犯していることもあるでしょう。それと同時に、更に高次における「神の法」の下で生きているということも忘れてはなりません。神の法は人の法の上であり、それを学ぶことで生きるべき指針が示されるからです。

「あなたのさばきを慕い、砕かれています」(20節)、「高ぶる者、のろわるべき者をお叱りになります」(21節)、「そしりとさげすみとを取り去ってください」(22節)、「たとい君主たちが座して、私に敵対して語り合っても」(23節)と四つの節の内容から、詩人がこの時に何らかの苦しみに遭っていたことが読み取れます。誰かから理不尽な要求を突きつけられていたか、裁判の過程にあったか。地上にあつてどんなに得をしても、最終的な審判者の御前に正しい存在でなければ、既に「のろわるべき者」になってしまっているかもしれません。畏れるべき方はいつでも神であり、この方のよしとされる道を常に探し求めたい。

最後に詩人は主を「私の相談相手」(24節)と呼んでいます(聖書協会共同訳では「私の良き助言者」)。御言葉を読んで福音の宝を見出し、祈りによって今日どのように行動すべきかを示していただく。このことを私たちは毎日繰り返して行く必要があります。そして、ただ聞いて終わることなく、御言葉を行なう人になりたいと思います。

御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの人であってはなりません。

(ヤコブ 1:22)